

＜長崎県民と長崎を訪れる人々の 心と命を守るためのサービス・ラーニング＞

研究年度 令和 4年度

研究期間 令和 4年度～6年度

研究代表者名 橋本優花里

共同研究者名 岩重聡美・高 芳・芳賀普隆

I はじめに

本研究は、サービス・ラーニング（以下、SL）という近年、注目されている教育手法を用い、教育と地域貢献を同時に達成しようとするものである。SLとは、「サービス（貢献活動）とラーニング（学習）をつなげ、ボランティア活動を学外で行い、その活動体験を通して学びを獲得することを目指す教育（村上、2007）」である。専門教育において獲得した専門的な知識・技能を、SLを通じて社会貢献活動の中で実際に活用することで、現実社会で実際に活用できる知識・技能へと変化させることが可能になる。学生は社会貢献活動を通じて自らの社会的役割を意識するようになり、結果的として、市民として必要な資質・能力、すなわち社会人基礎力が高められていくことになる（筑波大学人間学群 http://www.human.tsukuba.ac.jp/gakugun_bk/k-pro/aboutSL/aboutSL.html）。また、SLの実施は、学生への教育効果や地域への貢献のみならず、大学と地域の連携を深め、地域における大学の位置づけを明確にし、地域に必要とされる大学としてのさらなる発展を後押しするものと考えられる。

筆者らは、2019年度から3年間、「分野を超えた教員の連携による長崎県立大学版 SLプログラムの確立—共生をテーマにした取り組み」をテーマにした学長裁量教育研究費による研究を行い、県や相浦地域の関係者と参加学生とともに、協働で様々な活動に取り組んできた。その結果、新たな課題として次の1.～3.の内容が掘り起こされた。1. 長崎県内に住む、あるいは訪れる外国人のための県内施設の外国語表記が十分ではないこと、2. 相浦地域に住む人々が地域の交通安全や一人暮らしの状況に不安を抱えていること、3. 度重なる大雨により、相浦川の氾濫が警戒されること、である。また、この数年間においてはコロナ禍という状況の中、外国人の受け入れ環境の整備を考える一方で、学生を海外に送り出すことについても大きな制約が生じていた。そのような中、学生を安全に海外に送り出すためには、我々が海外の方々を受け入れることと同様の環境整備が必要となることから、留学先での施設、特に健康や命に係わる病院等での日本語表記についても改めて確認する必要があるだろう。そこで、4つ目の課題として、4. コロナ禍での本学学生の留学先での安全確認体制が十分でないことも見えてきた。

本研究では、以上の4つの課題について「長崎県民と長崎を訪れる外国人の心と命を守るためのSL」という一つのテーマにまとめ、3年の研究期間の間、それぞれの解決に取り組むことを目的とした。具体的には、1. については、病院を中心とした県内施設の外国語表記を充実させるための活動を、2. については、相浦地域の安全安心を促進するための活動を、3. については相浦川周辺の防災対策を促進するための活動を、4. については留学先の安全を確保するための活動を行うこととした。今年度は、参加した学生メンバーの問題意識やコロナの感染状況に伴う渡航制限を踏まえ、1. と3. の活動（本文内Ⅱ. 活動内容には、それぞれ1. と2. と表記）に取り組んだ。1. については、当初、病院を中心

とした県内施設の外国語表記を充実させるための活動を目指していたが、外国からの来訪者の困りごとに関するヒアリングに基づき、母語によらず誰でも緊急時に意思表示ができるツールの開発を目指した。また、3. については、芳賀ゼミの3年生の専門演習内において、地域プロジェクト活動として「災害から命を守るために「備え」をしよう！」と「相浦川の実態とこれから」の2つの取組が行われたほか、公共政策学科の公共政策実習の担当者からの声掛けでサービス・ラーニングに興味を持った学生2名による「大学生の防災意識向上を目指して」と題した活動が行われた。なお、本研究は当初、コロナ禍でのSLの実施方法に関する先進大学への調査も行うことも視野に入れていたが、コロナの感染状況が改善されつつあり、活動の範囲も今後広がる可能性が生じたことから、見送ることとした。

II. 活動内容

1. 緊急時の意思疎通を図るためのツールの開発（担当：岩重）

(1) 活動の経過

岩重ゼミの3年生6名の参加により、以下の手順に沿って進められた。まず、外国からの来訪者が長崎県で生活・観光する上で日常生活や緊急時の不安要素を減らすことを目的とし、来訪者の方々が抱える不安について旅行会社および病院へのヒアリングを行った。ヒアリングには、日中悠々旅行株式会社様、長崎みなとメディカルセンター様、佐世保市総合医療センター様、長崎県五島中央病院様の協力を得た。活動の期間中、教員は学生の活動の進捗を見守るとともに、必要に応じてメールの書き方やヒアリングのマナーについての指導・助言を行った。

表1 活動の手順

時期	活動内容
2022年5月31日	教員による活動内容の説明
2022年6月～7月	学生による活動の進め方の確認
2022年8月	学生による活動内容のブラッシュアップ
2022年10月	学生による日中悠々旅行山田様へのヒアリング
2022年12月～2023年1月	学生による長崎県内病院および留学生へのヒアリング
2023年1月18日	学生による活動の中間報告
2023年2月	学生による最終報告会の準備
2023年2月28日	最終報告会の実施

日中悠々旅行株式会社様へのヒアリングでは、外国からの観光客と接する中での困りごとや不安に感じる内容を中心に伺い、その回答を得た。具体的な内容は表2に示した。そして、すべての病院が外国からの患者を受け入れることができないことから、全ての病院で対応可能ではないため、旅行会社や外国からの観光客の方に対して、受け入れ可能病院の連絡先リストや対応可能言語のリストが必要であると考えられた。また、非言語での意思疎通ができれば通訳上の助けになることも示唆された。

長崎県内の病院様へのヒアリングでは、治療を行うにあたって必要な情報や困りごとを中心に伺い、その回答を得た。具体的な内容は表3に示した。その結果、病院によって外国からの患者の受け入れ環境が異なり、活用できるリソースが異なることが明らかになった。

表2 日中悠々旅行株式会社様へのヒアリング内容

内容	ヒアリング結果
<ul style="list-style-type: none"> 外国からの観光客の方々を病院に連れていく際に困ったことや不安に感じる 	<ul style="list-style-type: none"> 外国からの観光客を受け入れ不可の病院があること 医療通訳が必要であること（通常に通訳では、通じないこともあり、治療方法、薬の説明の難しさ、薬の副作用の適切な説明が特に困難） 国により治療法、薬、治療法、薬、支払い方法が違い、個人により保険への加入の有無も異なることから、外国からの観光客の日本の病院のシステムへの理解が不十分であること

表3 長崎県内病院様へのヒアリング内容

内容	ヒアリング結果
<ul style="list-style-type: none"> 必要な情報 	<ul style="list-style-type: none"> 身元確認 保険の有無 支払いが可能かどうかについての確認を要すること 紹介状の有無によって診察にかかる時間が異なること
<ul style="list-style-type: none"> 意思疎通の手段 	<ul style="list-style-type: none"> 医療通訳者、ドクター、付添人が中心となって意思疎通を行い、翻訳機を医療することもあること 病院によって差があること
<ul style="list-style-type: none"> 困りごと 	<ul style="list-style-type: none"> 日本にない薬を求めて訪れる外国の方がいること 宗教上の問題で治療が困難な場合があること 日本語が十分に話せない方は問診票を読むことができないこと（多言語問診票を自作している病院もある） 医療行為の同意書の作成

(2) 活動の結果

ヒアリングの結果から、外国からの観光客や日本語を十分に話すことができない外国からの在住者がけがや病気にかかった際、非言語で意思を伝達できるツールとしてリストバンドの作成を提案すること

とした。リストバンドの作成にあたっては、本学留学生へのヒアリングを行い、リストバンドに掲示するピクトグラムを選定した。リストバンドについては、どこでも作れて普及しやすくするために、ひな形を提供し、A4のコピー用紙で簡単に作れるものとした。リストバンドの試作品は図1の通りである。

リストバンド

《試作品》



《記載内容》

QRコード、お手洗い、飲料水、病院、警察、救急車、Wi-Fi、など

《QRコード内に載せたい情報》

外国人対応病院リスト、外国人向け相談窓口情報など

図1 試作したリストバンド

(3) 活動の振り返り

今回の活動を通じて見えてきた課題は次のとおりである。まず、病院によって意思疎通に利用する方法が異なり、同じ表現でも翻訳が変わる可能性があること、また、グローバル化が進む現代、またコロナの感染状況が改善され渡航に制限がなくなる現在においては訪日外国人の増加が見込めることから多言語への対応の必要であるが、現場では十分とはいえない状況であることである。また、旅行会社および病院へのヒアリングにおいて明らかになったように、県内のどこの病院でも外国からの患者を受け入れることができるわけではなく、外国の患者にとっては受け入れ可能な病院を探すことに困難があること、さらには諸外国と日本独自の医療体制の違いがもたらす患者と医療提供側の相互理解の難しさも外国からの患者の安心安全を脅かす懸念事項であることも示された。今後は新たに明らかになったこれらの課題を踏まえ、次年度の活動につなげていく予定である。

2. 相浦川周辺の防災対策

(1) 芳賀ゼミによる地域プロジェクト活動（担当：芳賀）

①活動の趣旨及び実施の背景

地域プロジェクト活動は、2019年度 長崎県立大学地域創造学部実践経済学科 2年生 基礎演習・芳賀ゼミ（5名）のゼミ活動において、地域実践の観点から新たな試みとして開始された。地域プロジェクト活動とは、ゼミでの調べ学習及びフィールドワークを通して地域の環境問題など地

域課題を発見するとともに、学生の視点で考え、調べ、まとめることで地域貢献につなげていく、学生提案型のゼミ活動のことである。長崎県立大学の周辺地区や相浦川周辺（大学周辺）について知ることで、環境の視点（水環境改善など）から魅力的な地域にしたい、そして環境を学ぶゼミとして何か地域に貢献できることはないか、という問題意識から本プロジェクト活動を立ち上げた。

3年生の専門演習では、2022年度（今年度）が3年目の取り組みである。なお、本プロジェクト活動では、2019～2021年度の3年間、学長裁量教育研究費におけるサービス・ラーニングプロジェクト「分野を超えた教員の連携による長崎県立大学版サービス・ラーニングプログラムの確立—共生をテーマにした取り組み」（代表：橋本優花里）と連携して取り組んできた¹。具体的には、「共生」という大きな枠組みのもと、「自然環境との共生に基づく環境保全」というテーマで、

- ・大学近隣地域の自然環境の観点からみた課題の整理
- ・ごみのポイ捨て問題に関する調査
- ・自然・歴史・文化からみた相浦川と地域とのつながりに関する調査
- ・大学生の防災意識に焦点を当てた調査研究

といったトピックに焦点を当てて、調査・研究を行ってきた。

それに加え、今年度から新たに立ち上がった学長裁量教育研究費におけるサービス・ラーニングプロジェクト「長崎県民と長崎を訪れる人々の心と命を守るためのサービス・ラーニング」（2022年～2024年度、代表：橋本優花里）に参画し、ゼミ活動と連携して取り組んだ²。なお、基礎演習でも4年目の地域プロジェクト活動の取り組みを行ったが、テーマやトピックの関係で、今回は専門演習芳賀ゼミ3年生の活動（一部、卒業論文4年生の活動内容も含む）のみ紹介する。

②2022年度 地域プロジェクト活動におけるテーマ設定

学長裁量教育研究費による第Ⅰ期のプロジェクトでは、長崎県や相浦地域の関係者、参加学生とともに、協働で様々な活動に取り組んできた。いくつかの課題が掘り起こされたが、自然環境との共生関連では、3)度重なる大雨により、相浦川の氾濫が警戒されること、が抽出された。近年様々な地域でみられる豪雨による災害も他人事ではない。佐世保校の近隣を流れる相浦川は、近年、氾濫こそないものの、毎年のように氾濫危険水位に達するような豪雨に見舞われている。大学周辺には日本人学生のみならず、多くの留学生や高齢者のような災害弱者が住んでいる。災害時には速やかに安全な場所に避難できるよう環境を整える必要もあるだろう。いずれの問題も、長崎県民や長崎を訪れる方々の心と命の安全性に関わる問題であり、サービス・ラーニングのテーマとしては大変重要な意義があるものとする（「令和4年度学長裁量教育研究費 研究計画書」p.1、および p.2）。

また、そもそも人間の生命維持に不可欠なきれいな水の確保は、水環境保全の観点からも不可欠である。さらに、長崎県でも有数の二級河川でもある相浦川を、水環境保全の観点から考察することは、相浦地域のみならず、流域の地域住民や佐世保市に住む学生にとっても、相浦川の存在をあらためて認識し、関心を持ち、川と人々との関わりについて考えるよい機会である。また、テーマ設定に関する学生の意見として、ゼミのフィールドワークにおいて、相浦川周辺を歩いてみた所、ところどころごみが落ちていて、川が汚いのではないかと思ったとのことである。

¹ 便宜的に、第Ⅰ期と名付ける。

² 便宜的に、第Ⅱ期と名付ける。

このような背景や問題意識から、専門演習芳賀ゼミでは、今年度の地域プロジェクト活動のトピックを以下のように設定した。

- ・「地域プロジェクト活動：災害から命を守るために「備え」をしよう！」（Aグループ）
- ・「相浦川の実態とこれから」（Bグループ）

③2022年度 地域プロジェクト活動の経過

2022年 芳賀ゼミの地域プロジェクト活動の経過は以下の通りである。

表4 芳賀ゼミ・地域プロジェクト活動の内容

年度	内容
2022年度	<p>【専門演習3年生】 (前期：Q1・Q2)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域プロジェクト活動の情報共有・相談 ・「2021年度 長崎県立大学 地域プロジェクト活動報告書」作成に向けて、グループごとに調査レポート作成と前年度の2学年合同の地域プロジェクト活動報告会資料修正作業実施 →2022年4月に「2021年度 長崎県立大学 地域プロジェクト活動報告書」〔第1版〕を発行。 <p>◆長崎県立大学佐世保校オープンキャンパスにおいて、ゼミ生によるパネル展示を実施 (後期：Q3・Q4)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2チームに分かれてグループワーク実施 →活動計画・調査計画の具体化、文献調査、フィールドワーク、アンケート調査の実施、調査結果の集計・集約 ・外部講師による講演 <p>◆2022年12月15日(木)：芳賀ゼミ2年・3年合同の地域プロジェクト活動報告会で活動・調査内容の発表、意見交換</p> <p>◆2022年12月17日(土)：第11回 佐世保校合同ゼミ報告会にて活動・調査結果について発表</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2023年2月、「2021長崎県立大学 地域プロジェクト活動報告書」〔第1版〕の修正作業 ・2022年2月中旬～年度末：地域プロジェクト活動における1年間の取りまとめ、「2022年度 地域プロジェクト活動報告書」作成に向けての作業実施～グループごとに調査レポート作成とこれまでの発表資料修正作業実施 <p>◆2023年2月、「2021長崎県立大学 地域プロジェクト活動報告書」〔第2版〕発行</p> <p>◆「令和4年度 学長裁量教育研究費オンライン報告会」にて、</p>

	専門演習 芳賀ゼミ Aグループ及びBグループの学生が活動内容を発表
	<p>【2022年度 卒業論文4年生】（2021年度専門演習3年生） 2022年2～4月</p> <p>・「2021年度 長崎県立大学 地域プロジェクト活動報告書」作成に向けて、A、B両グループにおける調査レポート作成と前年度の佐世保校合同ゼミ報告会資料修正作業実施 （後期：Q3・Q4）</p> <p>◆2023年2月、「2021長崎県立大学 地域プロジェクト活動報告書」〔第2版〕発行</p>

（出所）筆者作成。

④調査・研究内容

第1Q及び第2Qは、新型コロナウイルス感染症の影響もあり、時期によっては活動自体が制約されることもあったが、地域プロジェクト活動に関する共通認識、理解をゼミ内で共有した上で、関連資料の輪読やフィールドワークを行った。

第3Q以降は、KJ法を用いて、地域課題の洗い出しや気づいたことなどをゼミ生間で議論し、意見を出し合った後、活動計画・調査計画の具体化を行い、2チームに分かれてグループワークを実施した。その後、相浦地区など、大学周辺の地域課題の中から学生自身がテーマ・トピックを選び、文献調査やフィールドワーク、アンケート調査を実施し、結果の集計、集約を行った。

1) 「地域プロジェクト活動：災害から命を守るために「備え」をしよう！」

（専門演習 芳賀ゼミ Aグループ：4名で実施）

○調査・研究の目的

2018年7月6日における相浦川の氾濫危険水位到達など、佐世保の年間降水量が増加しており、豪雨が多発するのではないかと懸念がある。このような自然災害増加の要因の一つとしては、地球温暖化が指摘されている。自分たちでできる身近な、身を守るための対策が何かを探るとともに、地域住民と大学生の「備え」への意識を高めてもらうきっかけを作ることを目的としている。

○調査内容

学生が、相浦地区コミュニティセンター（あいあいプラザ）に連絡して理解を求めた上で、2022年12月1日～2日に、相浦地区コミュニティセンターにて、地域住民に対して、対面によるアンケート調査を行った。また、学生に対しては、担当教員の講義を受講している本学の学生を対象に、スマートフォンでQRコードを読み取ったGoogleフォームによる回答形式で実施した。学生が調査の計画を立て、準備し、教員が調査やアンケート内容の助言や修正を行った。主な調査項目としては、今まで災害時に避難した経験があるか、なぜ避難しない決断に至ったか、避難する事前準備を行っていたかであった。

○主な調査結果

主なアンケート結果としては、

- ・避難経験がない理由としては、自宅が安全であり、在宅避難が多いこと
- ・避難するための事前準備を行っていない割合が学生、地域住民とも多く、特に防災バッグの事前準備をしていない人が多いなど、「備え」への意識が低いことが明らかになった。

それに対し、身近な「備え」の事例として、身近な避難場所や危険個所の確認、住民同士の交流・訓練、日常の備蓄を意味するローリングストックが有効であるとともに、イベントや学校の防災授業を通して地域との交流を図りながら対策を進めることが提起された。

2)「相浦川の実態とこれから」（専門演習 芳賀ゼミ B グループ 6名で実施）

○調査・研究の目的

佐世保市に住んでいる地域住民にとって密接な関係にある川と言える相浦川の水の状態が上流・中流・下流できれいなのかどうか、またデータからみてどうか、を調べるとともに、相浦川を活かした取り組みができないかを考えた。

○調査内容

2022年11月11日（木）に、学生が実際に相浦川の上流・中流・下流へ行き、川の水を採取し目に見える範囲で比較を行った。この濁った水が相浦川に流れ込むことで下流に行くにつれて川の水に濁りが出ているのではないかと。人通りが多い川の付近（特に橋の下）ほどごみの量も比例して増えていた。この採取結果を受けて、実際の相浦川の水環境の実態を把握するため、2022年11月22日（火）に、ゼミ学生2人が佐世保市環境センターにて佐世保市環境部環境保全課担当者へのヒアリング調査を行った。

○主な調査結果及びまとめ

ヒアリング調査では、相浦川の水環境、水質保全への取り組みについて担当者に尋ねた。BOD³経年変化表による川の水質調査の結果からみて、BOD 経年変化表から見えるも相浦川の BOD 基準は3以下となっていることが明らかになった。また、佐世保市環境保全課では、定期的に、川の点検や住民への浄化槽普及の啓発活動を行っており、水質保全に取り組んでいた。

その上で、先進事例として、埼玉県の川の再生交流会や芦田川きれい☆きれいプロジェクト、相浦川の河川敷清掃を検討するとともに、これらの取組みの共通項としては、若い人が取り組みにも

³ BOD (Biochemical Oxygen Demand) は生物化学的酸素要求量の略。国土交通省の「水質調査項目の説明」によれば、BOD とは、水質汚濁を示す代表的な指標で、溶存酸素 (DO) の存在する状態で、水中の微生物が増殖呼吸作用によって消費する酸素をいい、通常 20℃、5 日間で消費された DO で表す。有機物量のおおよその目安として使われ、水の有機物汚染が進むほどその値は大きくなる。自然現象を利用した測定であり、自然浄化能力の推定や生物処理の可能性等に役立つ。しかし、化学工場排水や一部の合成有機化合物は測定対象に含まれない。魚類に対しては、溪流等の清水域に生息するイワナやヤマメなどは 2mg/L 以下、サケ、アユなどは 3mg/L 以下、比較的汚濁に強いコイ、フナなどでは 5mg/L 以下が必要とされている。対象は、河川。基準値は、類型により異なり、1~10mg/L 以下と定められている。

国土交通省ホームページ（「水質調査項目の説明」）

http://www.thr.mlit.go.jp/bumon/b00037/k00290/river-hp/kasen/plaza/jiko/suisitu_top/suisitu/Yougo/yougo.htm

（最終閲覧日：2023/03/28）参照。

積極的に参加していた。このことから、自由研究を通して生き物や、生き物が棲む川の水質を知ってもらおうとともに、相浦川を地域の人に知ってもらうこと、自治体によるライフジャケットや観察ケースなど、自由研究に必要な機材貸し出しの必要性を提起した。

⑤調査・研究成果の公表

主な調査・研究成果の公表としては、以下の通りである。

- ・長崎県立大学佐世保校 オープンキャンパス（2022年7月17日（日））において、専門演習芳賀ゼミ3年ゼミ生によるパネル展示を実施
- ・2022年12月15日（木）：芳賀ゼミ2年・3年合同の地域プロジェクト活動報告会で活動・調査内容の発表、意見交換
- ・2022年12月17日（土）：第11回 佐世保校合同ゼミ報告会にて専門演習 芳賀ゼミ3年Aチーム及びBチームが地域プロジェクト活動内容及び調査・研究結果について発表（なお、佐世保校合同ゼミ報告会において、芳賀ゼミAチームが1位を獲得した。）
- ・2023年2月、「2021長崎県立大学 地域プロジェクト活動報告書」〔第2版〕発行
- ・「令和4年度 学長裁量教育研究費オンライン報告会」にて、専門演習 芳賀ゼミ Aグループ及びBグループの学生が活動内容を発表

⑥今後の課題

今年度の地域プロジェクト活動においては、先行研究による仮説提示や、アンケートの調査方法、および解析方法に課題を残した。また、政策提言を行った内容の実現可能性や施策の実践例があるか、や効果的な実践方法についても、今後の検討課題としたい。

(2) 大学生の防災意識向上を目指して（担当：橋本・岩重・芳賀・高）

①活動の経過

公共政策学科3年生2名により、以下の手順に沿って進められた。まず、2022年9月に、相浦地区のニーズを知り、大学生に何ができるのかを検討するため、また近年、相浦地区でも大きな災害につながる可能性のある豪雨などが頻繁に経験されていることから行政としての防災の取組を理解するため、佐世保市役所相浦支所、相浦地区自治協議会関係者様への聞き取り調査を行った。その結果、いくつかの課題が浮かび上がり、特に大学生の防災意識がどの程度であるのかについては実態を調査する必要性が考えられた。そこで、本学学生を対象とした防災意識に関する調査を企画・実施した。なお、相浦市役所相浦支所等での具体的な聞き取りの内容とそれらに対する印象については、図2にまとめた。

大学生の防災意識調査の内容は以下の通りである。

調査対象者：長崎県立大学佐世保校の1年生～4年生を対象とした。

調査実施方法：Google フォームによるオンライン調査とし、授業またはゼミにおいてアンケートの入力先のQRコードを貼付したチラシを配布したうえで回答を求めた。

アンケート実施期間：2023年2月2日(木)～2月10日(金)

回答数：310名

調査項目：資料1の通り

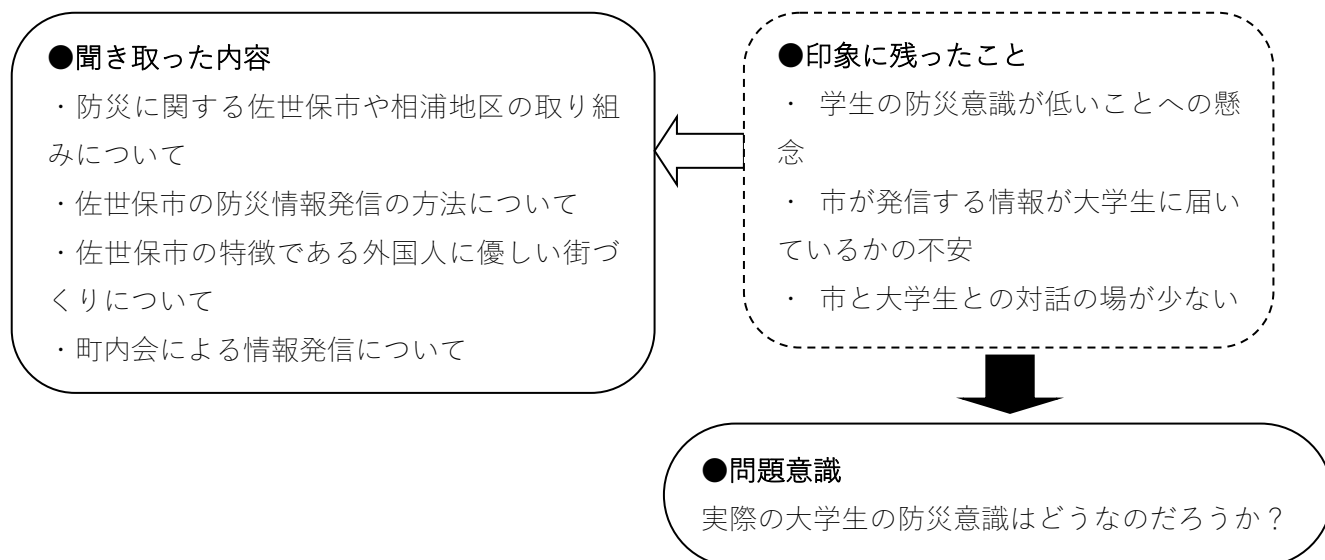


図2 相浦支所等での聞き取りの内容とそれらに対する印象

②調査結果からの提案

1) 市が発信する情報を県大学生が取り入れやすくする方法の検討

防災意識調査の結果、学生はインターネット（88%）やテレビ（70.8%）の媒体から防災情報を取り入れていることがわかった。一方で、佐世保市が発信している防災に関するサイトや広報物については、1つも知らないと回答したものが71%と最も高くなった。つまり、佐世保校の学生の9割以上がインターネットから情報を取り入れているのにもかかわらず、県や市が発信している情報誌やサイトを認知していないことが示され、大学生への周知が行き届いていない現実が明らかになった。

また、佐世保市が発信しているインターネット上の防災情報である「佐世保市公式LINE」および「佐世保市ハザードマップ（佐世保街ナビ）」について検討した結果、アクセスの不便さや複数の情報発信源による情報入手の煩雑さが問題として取り上げられた。

以上のことから、学生は学生の声を市に伝え、防災情報発信体制を共に作っていく「官学防災共創計画」と題した提案を行った。具体的には、佐世保市公式LINEを学生に周知することや、公式LINE上でサイトの使いやすさや改善点の意見を送ることで利便性向上を目指す企画などが挙げられた。

2) 学生が防災に当事者意識をもって取り組む方法の検討

防災意識調査の結果、学生の防災意識については「どちらかといえば低い」「とても低い」と回答した者が70%を超えた。また、出身地と防災意識の関係について分析した結果、過去の地震被災経験や地震が頻繁に起こりやすい地域が出身地の者はその他の地域に比べて防災意識が高いことが示された。

防災対策については、避難所の位置を知らない者が45%であり、一人暮らしの学生においてその傾向がより強いことが示された。また、家族や友人と対策について話し合った経験の有無については回答数がおおよそ半々の割合を占めた。話し合った内容については、「緊急連絡先」、

「避難行動」、「家族との待ち合わせ場所」の順で高くなったが、「危険箇所の確認」を行っている学生は少ないことが分かった。準備した防災グッズについては、水と懐中電灯が43%と最も高くなった一方で、防災頭巾やヘルメット、簡易トイレを備えている割合は低かったうえに、何も用意していないとする者も3割に上った。防災訓練への参加の有無については、80%以上の学生が参加した経験を持つものの、それは高校生までにとどまっており、大学生になっての参加は2%と極端に減少した。さらに、大学入学後に、佐世保市の防災に関する出前講座やオリエンテーション、ワークショップなどのイベントへの参加経験の有無を尋ねた結果、90%を超える学生が参加をしたことがないことが明らかになったが、学内での防災イベントが開催された場合は56%の学生が参加したいと考えていることも示された。なお、参加したいイベントとしては、「防災の知識に関する講座」や「避難(避難所)体験」であった。

以上のことから、学生は本学学生が災害を自分のこととしてとらえ、備えることが出来るよう「災害自分事化プロジェクト」を提案した。これは、特に被災経験の有無が防災意識の高さに影響することが示されたことによる。大学において災害を疑似体験できるような防災キャンプや災害食づくり、あるいはゲームなどを取り入れた企画を開催し、学生にリアルな体験を提供していくことで意識向上を目指していくことができると考えられた。

③活動の振り返り

今回の活動を通じて、学生は官学連携による防災意識の向上（官学防災共創計画）と、学内での防災意識の育成（災害自分事化プロジェクト）の2つの提案を行った。本活動に参加した学生は2名と少なかったが、大変意欲的に取り組み、充実した内容にまとめることができた。一方で3年生という学年の性質上、年度末には就職活動等が忙しくなり、教員との情報共有が滞る場面があった。今後は、教員との情報共有は主にメールを介して行われたが、より簡便なチャットなどのツールの導入を検討する必要があると考えられる。

III. まとめ

サービス・ラーニングをテーマとした本研究は、前回の学長裁量教育研究費による研究を合わせると4年目を迎えた。コロナ禍の影響を受けた過去2年間に比して、全体的に制約が少なく、充実した活動を行うことができたと言える。しかしながら、ゼミの活動として行われたものについてはその内容や進捗をゼミ内で確認できたものの、課外活動として行われたものについては情報共有や進捗管理が十分でないことが課題として残った。また、それぞれの活動において大変興味深い提案がなされたが、提案が提案で終わることなく、実行につなげていくための仕組みの構築も必要である。

なお、本活動については、オンラインで報告会を行った。資料2に記載したURLから視聴できるようになっている。

IV. 引用文献

村上むつ子（2007）. 地域貢献活動を学習に“サービスラーニング”の試み 教育学術新聞第2259号 (https://www.shidaikyo.or.jp/newspaper/online/2259/3_3.html)

（資料1）

学生の防災意識調査

この調査は、皆さんの防災意識を明らかにすることで、今後大学生に向けてどのような防災対策を講じていくべきかを同じ大学生の目線から検討することを目的として行われるものです。

データは統計的に処理いたします。そのため個人情報特定されるような形での発表は一切いたしません。率直なご意見をお聞かせください。取得した情報は、紛失や漏洩などが発生しないよう十分な注意を払って取り扱います。

所要時間は3分程度です。指示に従って当てはまるものを選択してください。また、答えたくない質問に関しては、無理にご回答いただく必要はありません。

なお、このアンケートは、令和3年度学長裁量教育研究「長崎県民と長崎を訪れる人々の心と命を守るためのサービス・ラーニング（研究代表者 地域創造学部 橋本優花里）」の一環として行われ、この研究に参加した長崎県立大学生によって実施されるものです。ご不明な点がございましたら、研究代表者の橋本（yukari@sun.ac.jp）にご連絡ください。ご協力をよろしくお願いいたします。

※「サービスラーニング」とは、社会貢献活動に参加し、経験学習を通して社会に対する責任感などを養う教育のことを指します。

長崎県立大学 地域創造学部 公共政策学科 3年 ○○○○・●●●●

（フェイスシート項目）

1. あなたの性別
男性・女性・無回答
2. 現在のあなたの学年
1年生・2年生・3年生・4年生・それ以外
3. あなたの居住形態
実家暮らし・一人暮らし・その他
4. あなたの出身都道府県を記述してください。

（調査項目）

1. あなたは、どのような方法で防災に関する情報（例：避難所・防災グッズ・ハザードマップ等）を入手しますか。当てはまるものすべてを選択してください。
テレビ・インターネット・新聞・雑誌・ラジオ・防災行政無線・防災メール・佐世保市が発信している広報物やサイト・長崎県が発信している広報物やサイト・その他
2. 以下に提示しているのは、佐世保市が発信している防災に関するサイトや広報物です。知っているものすべてを選択してください。（知らない場合は、「1つも知らない」を選択してください。）
広報させば・させば街なび・佐世保市公式LINE・防災ラジオ・1つも知らない
3. あなたの防災意識についておたずねします。あなたの防災意識は、以下の選択肢のどれに最も近いと思いますか。
とても高い・どちらかという高い・どちらかという低い・とても低い

4. 現在住んでいる場所で土砂災害や洪水が発生したときに、どこに避難すればよいのか理解していますか。
- はい・いいえ
5. あなたは実際に災害が起こった際の対策について、家族や友人と話し合ったことがありますか。
- はい・いいえ
- ➡「はい」の場合
- 5-1 どのようなことを家族と話し合いましたか。
- 緊急連絡先・家族の待ち合わせ場所・避難ルート・避難行動・危険個所の確認・災害が起こったときの身の守り方・非常食・防災グッズ・その他
6. 用意している防災グッズをすべて選択してください。（用意していない場合は、「何も用意していない」を選択してください。）
- 水・非常食・モバイルバッテリー・携帯ラジオ・防災頭巾／ヘルメット・懐中電灯・電池・長靴／運動靴・衣類・着替え・雨具・タオル・簡易トイレ・ビニール袋・救急セット・何も用意していない
7. あなたは、これまでに災害が発生したときや災害の危険を感じたときに、避難をした経験がありますか。
- はい・いいえ
8. あなたは防災訓練（避難訓練）に参加したことがありますか。
- はい・いいえ
- ➡「はい」の場合
- 8-1 参加した時期をすべて選択してください。
- 小学生以前・小学生・中学生・高校生・大学生・その他
9. 大学入学後に、佐世保市の防災に関する出前講座やオリエンテーション、ワークショップなどのイベントに参加したことがありますか。
- はい・いいえ
- ➡「はい」の場合
- 9-1 今まで参加してきたイベントの中で、役に立った内容や企画について教えてください。（自由記述）
10. 今後、大学内で防災に関するイベント等が開催されたら、参加したいと思いますか。
- 参加したい・都合が合えば参加したい・あまり参加したくない・参加したくない
- ➡「参加したい」「都合が合えば参加したい」
- 10-1 どのようなイベントであれば、参加したいですか。あてはまるものをすべて選択してください
- 避難体験・避難所体験・防災グッズの手作り体験・災害食づくり体験・防災知識に関する講座
11. 防災や避難情報に関して、大学に求めることがあれば教えてください。どんな些細なことでも構いません。

（資料2）オンライン報告会動画リンク先

https://youtu.be/tZYJu2kS_ZA

